

スポーツ版裏町人生

寺

スポーツ版裏町人生
寺山修司



スポーツ版裏町人生

初版発行 昭和五十七年二月二十五日

著 者 寺山修司

発行者 御喜家康正

発行所 御新評社

〒104 東京都中央区銀座五―六―十二みゆきビル

電話 東京(五七三) 四六一一

振替 東京〇―五六八八〇

印刷 大興印刷株式会社

製本 有限会社細沼印刷製本所

©1982

0095—03024—3337

落丁・乱丁本はお取り替えます

スポーツ版裏町人生

第一章◎スポーツ版裏町人生……………5

友よいずこ……………7

小指の辰……………16

見えない馬に賭けろ……………25

拾い屋仁義……………34

群をはなれた狼……………43

消された騎手……………52

三本指の男……………60

センターフライの犯罪……………68

鉄仮面……………76

星の流れに身を占って……………84

亡却の土俵入り.....93

夕陽よ、急ぐな.....102

さよならヒットをもう一度.....111

あなたの過去など知りたくないの.....120

君泣くや母となりても.....129

大男のたそがれ.....139

牙.....148

第二章◎誰か夢なき.....159

心は孤独な獵人のように.....161

無情の夢の万馬券.....166

片目の友への手紙.....171

金で買えないものは何?.....176

競馬の本、この一冊……………	182
孤児馬たちのブルース……………	187
次の映画こそ……………	193

第三章◎勝者には何もやるな……………	199
--------------------	-----

ウメノチカラ、今いずこ……………	201
負け犬の栄光……………	204
生まれた時代が悪いのか……………	207
ガラクタが光り輝くとき……………	212
この道はいつか来た道——あとがき……………	216

第一章◎スポーツ版裏町人生

友よいずこ

豚箱に雨の降る夜は

酔っぱらって喧嘩して、豚箱へ放りこまれたとき、同房に一人の啞がいた。

はじめのうち、皆は彼が黙秘しているのだとばかり思っていたが、何日か経つうちにほんとの啞だということがわかった。啞は、一緒に暮していた男を出刃包丁で刺したということであった。

無論、それが本当かどうかは、本人が語らないので確かめることができない。しかし、私が心をひかれたのは、この啞が刺した相手もまた啞だった、という話であった。身よりのない二人は、一つの下宿で、兄弟のように（というよりは夫婦のように）暮していたと言うのである。

「よくある痴情事件だよ」

と、取り調べの刑事は言った。

「もう一人の啞が女をつくったので、あいつがやきもちを妬いて、喧嘩になったのさ」

私は、少年時代に読んだ小説の一節を思い出した。

「その町には二人の啞がいた。

二人はいつも一緒だった。毎日、朝早く家を出ると、腕を組んで町の大通りを働きに出かけて行った」

という書出しではじまる、その小説の題は「心は孤独な獵人」という題であった。「心は孤独な獵人」とは、いい題だな」と私は思ったものだった。

同房的啞は、その外見から皆に「へぶち牛」と呼ばれていた。「へぶち牛」は、気のやさしい、おとなしい男だった。将来、できればボクサーになりたい、ということを手真似で語り、すばやいシャドウボクシングの身ぶりをしてみせて、皆をおどろかしたりした。

同房的バーテンの「へ左ぎच्छょ」が「いくら腕っぶしがよくっても、豚箱にいたんじゃ無理だよなあ」と言って溜意をついた。

しかし、世の中には運つてもものもあるからね、と私は言った。

ヘビー級の世界チャンピオンだったヘンリー・ピアースが英国の刑務所から頼まれて、灰色の壁に囲まれた囚人たちの慰問のため、エキジビションをやることになったとき、スパリーングの相手が囚人から公募されたが、だれもが「鼻の骨を折られる」のをいやがって引き受けようとはしなかった。

そのとき、肉屋の小僧あがりのジョン・ガリーという男がたった一人だけ志願して出

て、チャンピオンを相手に堂々と渡りあい、そのことが評判になって、スポーツの有力団体のバックアップを受けて、刑期繰りあげ釈放になったのである。勿論、出所してプロボクサーになる、という条件付きであった。そして、一八〇五年、英国の刑務所を出た肉屋の小僧のジョン・ガリーは、世界チャンピオンになったのだった。

「そんな、うまい話でもあれば別だがね」と私は言った。

雨のつづきの毎日だった。

巷では、わびしい歌が流行っていた。

星の流れに身を占って

どこを寝ぐらの今日の宿

すさむ心でいるのじゃないが

ぶち牛の陽の当る場所

二、三年たったある日。

いつものように、酒場「昨日」の止まり木でスポーツ新聞を読んでいた私は、一行の見出しに目を釘づけにされた。

「啞のボクサー、ランキング入り」

新聞の片隅の写真は、小さいのでぼやけて見えたが、啞のボクサーが、まぎれもなく「へぶち牛」であることを物語っていた。「へぶち牛」は、フライ級十位の浜松を二回でKOして、ランキング入りしたのであった。

新聞によると「へぶち牛」の名は赤城繁雄であり、野口ジムの所属である。

「あいつ、とうとうやったのだな」

と思うと、私は急にうれしくなった。

「へぶち牛」は、私たちにとってジョン・ガリー同様の希望の星になった。

やがて、啞の赤城は、バンタム級に移り、専門家の注目を集めるようになっていった。

私が、はじめて彼の試合の放送をきいたのは、対矢尾板戦である。

バーテンをしていた私は、私の頭上にあるテレビの画面を見ることができず、アナウンサーの昂奮した声だけをきいていたが、試合は大接戦で、どっちが有利とも言えぬままに最終ラウンドのゴングとなった。勝ったな、と思ったが、小差の判定負けだった。

「啞のボクサーには、いろんなハンデがあるんだよ」

と新聞記者の岸田は画面を見ながら言った。

「相手がその気になればサミング（親指突き）や膝使い、エルボー（肘打ち）など何でもできる。」

啞はレフリーに、そのことを抗議しようとしても言葉が通じないからね。それと、いか

にもゴングが鳴ったように、引きあげかける。啞はゴングがきこえないので、てっきり休憩だと思いこんでノーガードになって下りかける。

そこへ目がけて、とどめの一撃！　って手もあるしね」

さまざまなハンデはあるにしても、ボクサー赤城繁雄の活躍は目ざましかった。

彼にとって、グローブをはめた拳は、言葉の代りであり、リング上では、ものすごく能弁な男に早変わりして、相手を「説得する」のだった。

私は彼の栄光を、同じ豚箱出身者として、誇りに思っていた。へぶち牛は、根性の男だよ。と、一年おくれで出所したバーテンのへ左ぎっちょは言った。みんなでへぶち牛の後援会を作ってやろうか。

ようやく詩が売れはじめた私と、酒場「昨日」のママのひもになって、足を洗ったバーテンのへ左ぎっちょにとって、春はすぐそばまで来ているように思われた。

何しろ、へぶち牛に負けてはいられないのである。何か、でっかいことでもやらなきゃなあ。

と、私たちは溜息をついてばかりいた。「新宿ブルース」の出はじめの頃である。

右を向いても　だめだから

左を向いて　見ただけよ

夜の新宿　ながれ花

矢尾板対赤城の一戦

ボクシング雑誌に紹介された、啞のボクサー赤城の小さなエピソードは、私の心に沁みるものだった。

ある夜、あまり早く寢床に入ったので、夜中にひとり眼がさめた。

眠ろうとしても、なかなか眠れない。

仕方がないから、起きてロードワークをしようと思った。夜中の二時過ぎだったが、走ってゆくと夜風が頬にあたって、気持がよかった。しばらく行くと、警官に不審訊問された。

「おまえは誰だ？」

と警官はきいてきた。

「こんな時間に、走ってどこへ行くのだ？」

赤城は、説明したかったが、ものを言うことができなかった。それに、一生懸命、口の動きと指話とで話したって、わかってもらうことはむずかしい。警官は、きびしく追及した。

「さあ、言ってみろ。おまえは、何者なんだ？」

赤城は、仕方なしに自分がボクサーであることを身ぶりで示そうと、ファイティング・ポーズをとり、シャドウの動きをして見せた。すると、警官は、じぶんが殴られるのだと

思つて、

「本官に抵抗するのかッ」

と手錠をとり出した。

悲しい、すれ違いのエピソードであつた。

赤城の戦績は、ランキングの六位までで、ストップし、それからなかなか上らなくなつた。

当時、フィリピンには啞のチャンピオン、ボニー・エスコバルがいて、大活躍しており、フラッシュ・エロルデら強豪を、一蹴してしまつたというニュースが入つていた。

エスコバルは、日本のリングに登場し、やがて金子繁治と世紀のタイトルマッチをやることになるだろう。

へぶち牛にもチャンピオンになつてもらいたいもんだね。

と、私とへ左ぎっちよは話しあつた。このままずるとランキングから消えてゆくのがさびしすぎる。豚箱仲間に訪問されるのは迷惑かも知れないが、一つ、リングまで応援にいこう、ということにしたのである。

赤城と矢尾板の再戦の日、私たちは少しばかりめかしこみ、揃いの背広を着て芝公会堂まで出かけていった。だが、そこで、満場の拍手に迎えられてリングに上つた啞のボクサー赤城繁雄を見たとき、私たちはガク然とした。

赤城はへぶち牛ではなかつたのだ。

よく似ていたが、別人だった。

灰色のぼやけたテレビの画面の中ではよくわからなかったが、目の前で見ると、その違いは、はっきりとわかった。私たちは、自分たちが、勝手に自分たちの過去を美化するために、夢を見ていたのだ、ということをお願い知らされた。

だが、ここまで来たら私たちは赤城を応援するほかはなかった。

試合は、一方的に矢尾板のペースで進み、じり足の赤城に、矢尾板は素早いジャブからストレートをくり出した。啞のボクサーは、ゴングをきくことができない。セコンドの手の動きで、ラウンド終了を知るのだが、苦しくなった赤城は、たびたび、セコンドの手の動きを見ようと矢尾板から目を外らし、そのたび、痛打を浴びた。

パンチ・ドランカー（打たれて、酔っぱらいのようにフラフラ）になった赤城、血まみれになった赤城を見ると、私たちはじぶんたちが夢見たことへ罰を下されたような、にがさを味わわされない訳にはいかなかった。

啞のボクサー赤城は、惨敗した。

十八勝十八敗五引分。

これが、彼の全成績だった。

引退して、いまは大井町の電気会社で働いているということである。

だが、啞のボクサー赤城繁雄が、私たちのへぶち牛でなかったとしたら、私たちのへぶち牛は、どこへ行ってしまったのだろう。